

2 トップのリーダーシップ

トップは安全のコミットメントを強いリーダーシップにより明確にすること

トップのリーダーシップは大変重要な要素です。経営者だけに限らず、部長や課長クラスも含めたトップの人間には、強いリーダーシップを持ち、率先して安全性の確保に取り組むことを明確にすることが求められます。そのためには、現場の生の意見を率先して取り入れることが不可欠です。また、安全に関する研修会の導入や、自ら現場を巡回して安全に関する問題を探り、必要に応じて細かい指示を出していくことも求められます。

トップに立つ人間には、たとえ現場からの反対があっても、安全だと信じたことは確実に実行できる強いリーダーシップが必要です。トップの行動が持つ影響力の大きさを決して忘れてはならないのです。

7 活気のある職場環境

自由に物が言え、活気と創造力のある職場環境であること

安全文化の醸成には、「活気と創造性に溢れ、誰もが自由にものを言える職場環境」という要素が重要な役割を果たします。その大前提として、組織を構成している一人一人が、自分の仕事にやりがいを感じていなければなりません。また、同僚の間違った行動を指摘したり、規則やマニュアルの改善を提案するなど、組織全体の安全確保に結びつく活動にも積極的に参加する意欲が求められます。もちろん、自分がミスをした場合にはきちんと上司に報告し、同僚からの指摘も素直に受け止める謙虚さも必要です。

自由に物が言える環境の中で一人一人が積極的に行動し、より確かな安全の実現に向けて努力していく姿勢が求められているのです。

安全文化の7原則



日本原子力技術協会

1 安全最優先の価値観

安全最優先の価値観が組織で徹底されその構成員である個人に認識されていること

安全文化の醸成には、関係者全員が安全に対する共通の価値観を持っていることが必要です。そのためには、安全最優先の価値観が組織内で徹底されていることはもちろん、個人レベルでもその重要性を十分に認識していることが求められます。

具体的には、作業の効率ではなく安全を最優先に考えることが重要であり、マニュアルやルールをしっかりと守り、「確率」ではなく「確実」を優先させる行動が欠かせません。

また、自分の行動を常に見直ししながら、定期的に自己評価を実施し、安全最優先の価値観を再確認することも大切です。

3 安全確保の仕組み

業務や活動に安全確保の仕組みが組み込まれていること

業務の中に安全確保の仕組みがしっかりと組み込まれていることが求められます。

個人レベルでは、安全に関する組織の理念や方針を正しく理解し、実際の業務に活かしていることが重要です。また、マニュアルやルールについても、守ることで安全性がどのように保証されているのか、その根拠を正しく理解しておく必要があります。

さらに、安全性に疑問を感じた時には、作業を止めて確認するような正しい判断力を持つとともに、スケジュールに遅れが生じる可能性があっても、作業手順やルールを守り通すことが求められます。

安全を脅かす要素を確実に取り除いておくと同時に、安全性にプラスとなる仕組みについては、積極的に整備を進めていくことが重要なのです。

4 円滑なコミュニケーション

関係機関・組織・部門間および一般社会との間で円滑なコミュニケーションがなされていること

コミュニケーションは、安全文化の醸成に欠かすことのできない重要な要素です。組織内部はもちろん、協力会社などの外部の関係機関、さらには一般社会との間でも、常に円滑なコミュニケーションが求められます。

組織内では、安全に関して疑問を感じた時に、仕事仲間と議論することや上司への報告が不可欠です。また、社内の他部門はもちろん、協力会社などの関係機関とも積極的に議論を行い、コミュニケーションを図っていく必要があります。

コミュニケーションに関連した各種イベントやセミナーへ積極的に参加し、コミュニケーションスキルの向上を図ることも大切です。

5 個人・組織の姿勢

組織およびその構成員である個人は問いかけ、学び、責任を持って是正する姿勢があること

安全に関して常に問いかけ、学び、責任を持って是正する姿勢は、個人に限らず、組織全体にも求められる重要な要素です。

まずは、過去の不具合事例やヒヤリハット体験を積極的に活用すると同時に、研修や訓練などの教育活動にも率先して参加することが求められます。

学習という点では、自分の仕事だけに限定することなく、関連性のある仲間の仕事内容についても学び、自分の担当作業の安全性にどのように関わるものなのか、正しく知っておくことが非常に大切です。また、他の組織や原子力以外の業界における良好事例など、安全に関して幅広い情報を収集する意欲も持っていなければなりません。

6 潜在的リスクの認識

組織およびその構成員である個人は、業務や設備の潜在的なリスクを認識すること

安全性をより確かなものにするためには、業務や設備が抱えている潜在的なリスクを常に認識しておくことが不可欠です。

まずは、マニュアルや規則が万全ではないことを認識することが重要であり、潜在的なリスクが考えられる場合には、安全性を十分に検証した上で改良を加えていく積極性が求められます。

個人レベルでは、ミスや事故を起こす可能性が自分にもあることを十分に認識するとともに、担当する設備や機械に関しても、トラブルを起こす可能性がゼロではないことを忘れてはなりません。

自分の仕事の中に、安全を脅かすリスクが潜んでいるか、常に問いかける姿勢を持つことは、プロとして当たり前の使命なのです。